

平成14年度「ことばのゆれ」全国調査から②

短くなる「数日」

山下洋子／宮本克美・放送研究部

はじめに

先月号では、中国、韓国・朝鮮から入ってきた料理名表記のゆれについて取り上げた。今回は、数に関することばを取り上げる。

調査では、「数日」「数人」「数百人」の「数」が指す範囲はどれくらいと考えるか、また、「未明」は1日のうち、どのあたりの時間帯を指すと考えるかを聞いた。

なお、調査の概要と質問文は、単純集計(p.100)のとおりである。

まず、「数日」「数人」「数百人」について

1. 「数〇〇」の範囲

一般に、「病気の回復には、数年かかる」や「ここ数日の彼の様子に変わったことはなかった」などと表現されることがある。

この「数年」「数日」は一体、どれくらいの範囲を表すのだろうか。

こうした疑問から、今回の調査語に「数〇〇」を加えることにした。

ニュースでは、日にちや人数が特定できる場合は、厳密な数字を入れるようにしている。「数〇〇」ではあいまいになるおそれがあるからである。ただし、10人未満であるが、厳密に人数などが特定できない場合、「数人」などの表現を使うことがある。

放送で「数〇〇」を使う場合、具体的に

「数(すう)」が指すのはどれくらいなのか、その範囲は決めていない。

今回の「ゆれ調査」では「数〇〇」の数(かず)の範囲はどれくらいだと考えるかを聞いた。また、ケタとそれに続く助数詞によって「数(すう)」が指す範囲は違うのかを調べるため、助数詞が違う「数日」「数人」と、ケタの違う「数百人」について、その範囲を聞いた。

調査にあたって、「数〇〇」についての各質問を連続して並べると、前の回答に影響を受けてしまうと考え、3つの質問の間に別の質問を入れ、離して配置した。

なお、本論文では、「数」と「」で囲んだ場合は「すう」と読み、囲んでいない場合は「かず」と読むこととする。

1-1 国語辞典などの扱い

1603年(『邦訳日葡辞書』)以降、現在まで出されている国語辞典、計107冊(注1)に書かれている「数」の意味を調べた。

現行の辞典の多くは「3, 4から5, 6」くらいの数を指しており、これは古い辞典でも大きな違いはない。

・初出

初出は『改訂増補和英語林集成』(1886・丸善)である。(ここでの「初出」は掲載内容

を調べた辞典類の中で調査語が出てくるいちばん古い辞典を指す)。語釈には「数」の項目に「several less than ten」とあり、「10より少ないいくつか」という意味になっている。また、「数人」を「several, few」と訳している。これは和英辞典であるが、普通の国語辞典で語釈がのっているのは、『語林(改訂版)』(1911・三省堂)からである。見出しは「数」で、その中に、「数個」の意味を「3つ4つ。5つ6つ」とのせている。

「数日」は、1914年に出された『辞海』(郁文社)にのっており、「10日以内」である。

「数人」は『大日本国語辞典』(1915～1919・富山房)で「2人以上」。そのほか、ほとんどが、「3, 4」「5, 6」を指している。

・辞書による意味の差

「10に満たない数」などと多い数値で「数」の意味をとらえているのは、先にあげた、大正時代の『辞海』(郁文社)のほか、『新版広辞林(15版)』(1963・三省堂)である。

また、「2～10の間」のように幅を広くとっている辞書もある。『新版広辞林(15版)』では、次のような語釈になっている。

「数」：体言の上にあつて、2から10に満たない数を表す。

「数日」：2から10の満たぬ日数。
3, 4日。5, 6日。

「数人」：2から10に満たない人数。
3, 4人。5, 6人。

同様の意味をのせているのは、このほか、『新潮国語辞典』(1982・新潮社)、『集英社国語辞典第2版』(2000・集英社)など7冊である。

「数」の意味を「2, 3」としたのは、『例解国語辞典(増訂版)』(1976・中教出版)が初

めてである。「数」の意味に「2, 3乃至5, 6ぐらいまでの数を表す語」とある。そして、1980年以降の辞典で「2, 3」を含めるものが多くなる。『大辞林(初版)』(1988・三省堂)では、

「数」：いくらかの。2, 3の。5, 6の。

「数日」：2, 3日から, 5, 6日。

「数人」：2, 3人から5, 6人程度の人数。

と、助数詞に関係なく、「数」の意味に「2, 3」は含まれている。それ以前の辞典では、「2以上」などと「2」を含めるものはあったが、「2～10」といった広い範囲を指すものなどであり、「2, 3」を意味に含めるようになるのは1980年以降の辞典に多い。

・助数詞による変化

助数詞によって、「数」の意味を変えている辞典は7冊である。

『大日本国語辞典』(1915～1919, 富山房)は、「数日」の意味を、「4, 5日。5, 6日」としている。そのほか「数年」も「4, 5年。5, 6年」である。一方「数人」は「2人以上」と少ない数も含めている。このように「数日」「数年」は「4, 5」または「5, 6」とし、「数人」は「2以上」の数値としている辞典は、『大辞典』(1934～1936・平凡社)、『増補新辞典』(1935・至文堂)である。

また、『日本大辞典 言泉』(1927・大倉書店)は「数日」の意味を「4, 5日。5, 6日」, 「数人」は「3, 4人。4, 5人」としている。『新潮国語辞典(新装改訂版)』(1982・新潮社)は、「数日」を「5, 6日」と限定しているのに対して「数人」は「3, 4人から5, 6人」と幅を持たせている。

『広辞苑』(岩波)は版によって意味を変えている。初版(1955)から3版(1983)までは「数日」「数人」とともに「3, 4から5, 6ほどの範囲」となっているが、4版(1991)から「数日」は「2, 3日から5, 6日ほどの日数」であるが、「数人」は「3, 4人, 5, 6人ほどの人数」である。「数日」には幅を持たせているが、「数人」は幅を狭く考えているようだ。

そのほか『岩波国語辞典(6版)』(2000・岩波)では、「4から6ぐらいの範囲。近ごろは、3か4かの程度を言う人が多くなった」と説明している。

参考として、「若い世代ほど少ない数を指す傾向が強い」と書く辞典も見られる(『新選国語辞典(8版)』2002・小学館)。

各辞典では、「3, 4」「5, 6」を中心に、2~10までさまざまな意味でとらえている様子がわかる。

古い辞典では、10以内など広い範囲を指し、1980年以降の新しいものでは、「2, 3」を指す場合が増えてくる傾向がある。

1-2 調査の結果

次に調査の結果について見ていく。今回の調査では、「数」に幅を持たせて考える人もいるのではないかと考え複数回答とした。たとえば、「数」は「2~3」から「5~6」の範囲であると考えの人がいるだろうと考えたわけである。この場合、「2~6」の幅を持っていると考える。幅については後述する。

しかし、調査の結果、複数回答をした人は少なかった(表1)。「数」を「2~3」ではなく、「2~4」「2~6」などのように2以上の幅を持って考える人は少ないようである。

表1 単数回答と複数回答

	数日	(%)	数人	(%)	数百人	(%)
単数回答	1,256人	91%	1,173	85	1,161	84
複数回答	113	8	197	14	201	15
わからない・無回答	5	0	4	0	12	1

以下、「数日」「数人」「数百人」の順に見ていく。

なお、それぞれの項目では、まず、複数回答と単数回答を合わせた結果について述べるが、年代別などでは、単数回答をした人を抜き出して集計した数値を使用する。複数回答をした人と、単数回答をした人とでは、「数」への意識が違うのではないかと考えたためである。

単数回答を抜き出しての集計は、有効回答者全員である1,374人を母数とした。

そのため、図表の数値を足しても100%に満たないものがある。不足分は複数回答および無回答の割合であり、計算間違いではない。

1-2-1 数日

・先行調査

1981年2月に行った都内中学生(港区、台東区の中学2校を調査)に対して「数日後は何日くらいあとか」という質問で聞いている(注2)。

また、1996年11月の「ことばのゆれ」調査で「数日後と言われたら何日くらいあとを考えますか」という質問で聞いている(注3)。

国語辞典の扱いでも述べているが、「数日」は、「3~4日」「4~5日」「5~6日」くらいを指すのが一般的であるが、「81年中学生調査」でも、「2~3日後」がもっとも多く、「3~4日後」が続く結果であった。「96年ゆれ調査」の結果では、「2~3日後」が

もっとも多く、「3～4日後」が続いていた。また、年代別に見て、若い年代ほど「2～3日後」と答える人が多かった。若いほど「数日後」の期間を短く考えており、また、年代が高くなるほど、「3～4日後」「4～5日後」など期間を長く考えている、という結果であった。

今回は、「数日」の期間を聞いたもので質問文が異なるという点と、複数回答での設問になっている点から、前回調査と単純に比べることはできない。

しかし、「2～3」が多く、「3～4」が続いているという傾向は同じである。

・「数日」は「2～3日」の回答が多い

複数回答、単数回答を合わせた結果は、図1のとおりである。「2～3日」がもっとも多い。

図2は、複数回答をした人を除いて、単数回答の人だけを抜き出したものである。回答は、「2～3日」がもっとも多く、「3～4日」が続いて多かった。

男女別では、ほぼ同じような結果になっており、大きな差は見られない。

・60歳以上も若者に近づきつつある？

前述のとおり、国語辞典で見ると、「数」が指す範囲がだんだんと短くなってきている。

今回の調査でも、「数日」は、「2～3日」が多く、「3～4日」「4～5日」が続いている。「2～3日」と「3～4日」の差は大きい。これは、年代別に見ても各年代同様の傾向である。単数回答した人を年代別にわけると図3のとおりである。

「96年ゆれ調査」では、年齢が高くなるほ

図1 「数日」(単数回答・複数回答含む・%)

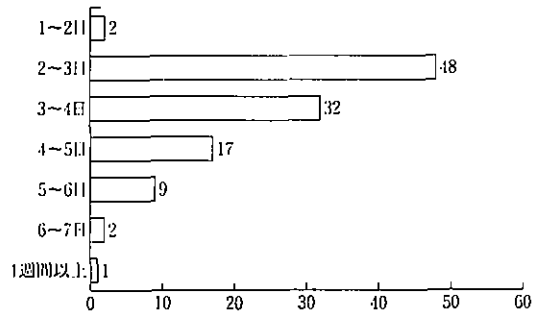
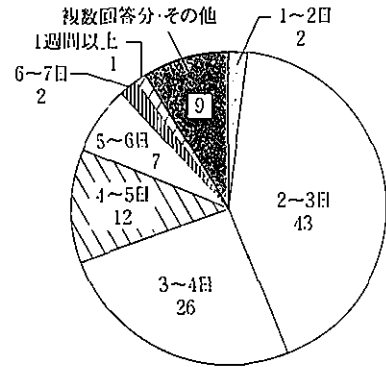


図2 「数日」(単数回答・%)



ど「数日後」の期間が長く、「2～3日後」と「3～4日後」「4～5日後」がほぼ同数で、年代が若くなるほど「2～3日後」に回答がかたよっていた。今回の調査では、年代による回答のかたよりはそれほど見られない。60歳以上でも、「2～3日」がもっとも多く、「3～4日」「4～5日」「5～6日」の数値をひきはなしている。

60歳以上も「数日」に関しては、短い期間を指すように変化してきている。

しかし、一方で、60歳以上は、ほかの年代より、「4～5日」「5～6日」と答える人が多いのも確かである。

「4～5日」は、20歳代、30歳代ではそれぞれ8%、6%と少ないが、40歳代から年代があがるに従って多くなる(40歳代：12%、

50歳代：14%，60歳以上：15%）。また「5～6日」も年代があがるに従って多くなっていることがわかる。

なお、「1～2日」「6～7日」「1週間以上」などの選択肢も用意したが、回答はほとんどなかった。「81年中学生調査」と「96年ゆれ調査」では「1～2日後」については聞いていないが、「6～7日後」「1週間以上」は聞いている。このときも、これらの回答はほとんどなかった。

・平均は「3.4日」

「数日」は具体的にどれくらいと考えられているのか、平均を出してみる。単数回答の人のみについて計算をした。

各選択肢の日数の間をとり、それぞれの回答者数とかけて、単数回答をした人の数で割るという計算方法である（注4）。

この計算の結果「数日」の平均は「3.4日」であった。「81年中学生調査」では平均は「3.7日後」という結果であった。また、「96年ゆれ調査」を同様に計算し、平均を出したところ、「数日後」は「3.8日後」であった。

調査語が異なるため、比較しにくいだが、「数日」が指し示す日数は短くなってきていると考えられる。

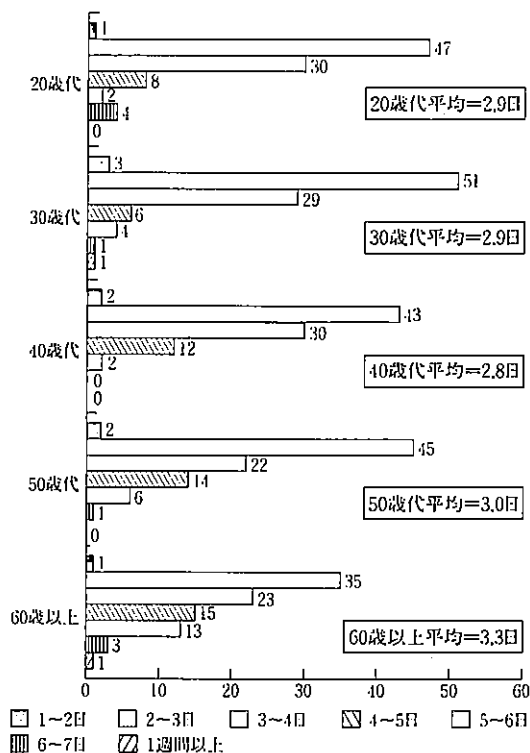
また、年代別の平均は図3のとおりである。年代が高くなると、平均の日数も増えている。

・複数回答者の「数日」の幅は「2.4日」

複数回答をした人は、「数日」を2日以上幅があると考えている人であり、その幅の平均がどれくらいなのかを見る（注5）。

この計算の結果、幅の平均は「2.4日」であった。複数回答をした人が少ないことから

図3 「数日」（単数回答・年代別・%）



わかることだが、「数日」が2日以上幅を持っていると考えている人は少ない。また、幅を持って考えている人でも、その幅をそれほど広いとは考えていないことがわかる。

・「二、三」ということばが消えた？

なぜ、各年代をとおして「数日」の意味が短い期間をさすようになってきているのだろうか。

先にも触れているが、1981年に「数日後」について中学生に聞いている。この調査報告に、見坊豪紀氏が雑誌に書いたことばを引用している（注6）。

それによれば、「2～3日という言い方がほかにあるのだから、数日後はそれ以上のはず」と答えた若い人が当時いたということである。

国語辞典を見ると「二、三」ということばが各辞典にのっている。「2つ3つの。いくらかの」といった意味である。

1981年当時の若者が持っていた「2、3日」ということばがあるのだから……」という意識は、今の人にはなくなっているのだろうか。そのため「数日」で「2、3日」の意味も含めてしまうようになったのだろうか。

「二、三」について調査をしていないため、今回の調査からはわからない。しかし「二、三」ということばが「数〇〇」に置き換わっているということもありうるのか、今後、考えていきたい問題である。

1-2-2 数人

次に「数人」についてである。ケタは同じであるが、助数詞が違うことで、「数日」の結果と違う傾向が見られるかどうかである。

・「数人」は

「2～3人」から「5～6人」に分散複数回答、単数回答も合わせた結果は、図4のとおりである。「3～4人」がもっとも多く、ほとんど差がなく「2～3人」が続いている。「4～5人」「5～6人」と答える人

図4 「数人」(単数回答・複数回答含む・%)

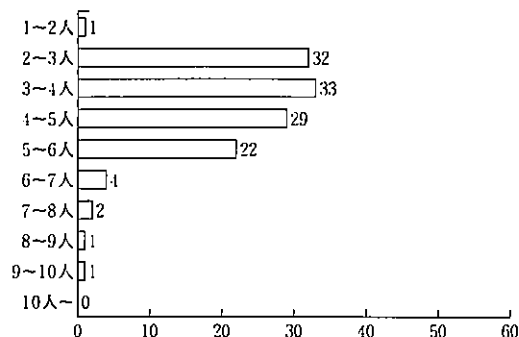
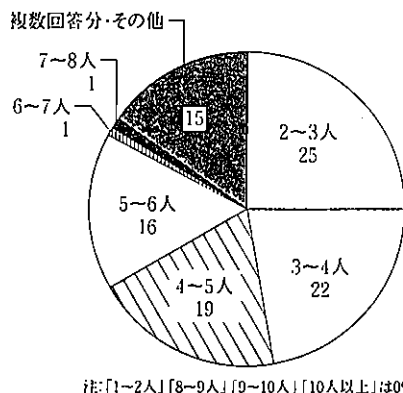


図5 「数人」(単数回答・%)



注:「1～2人」「8～9人」「9～10人」「10人以上」は0%

も、それぞれ29%、22%と少なくない。

単数回答の人だけを見ると、図5のとおりである。

今回の調査では「10人以上」まで10の選択肢を設けているが、回答は「2～3人」「3～4人」「4～5人」「5～6人」の4項目が多くなった。「数日」と比べると、「数人」のほうが、「2～3人」から「5～6人」までの各選択肢に回答が分散している。

「数人」は「2～3人」から「5～6人」の範囲でとらえられている。

単数回答を男女別に見ると、「2～3人」は女性が27%、男性が20%である。そのほかに差は見られない。「2～3人」が多くなっているのは、特に、女性20歳代に見られる傾向である(表2)。

表2 「数人」は「2～3人」と答えた人(男女年代別・単数回答)

	男性 (%)	女性 (%)
20歳代	20	39
30歳代	26	26
40歳代	26	27
50歳代	24	26
60歳以上	18	24

・年代の差が激しい「数人」

単数回答を年代別に見ると、図6のとおりである。「数日」は、「2～3日」が各年代ともに多くなっており、年代による差があまり見られなかった。それに比べて「数人」は、年代による差が見られる。

20歳代と40歳代では、「2～3人」が多く、「3～4人」が続いているが、30歳代、50歳代では、「3～4人」がもっとも多く、「2～3人」が続いている。また、60歳以上を見ると、「4～5人」「5～6人」と答える人が多い。

60歳以上は、「数日」では「2～3日」がもっとも多く、続く「3～4日」と大きな差があった。これは20歳代など若い年代に似た傾向である。しかし、「数人」では、「2～3人」「3～4人」よりも「4～5人」「5～6人」が多く、若い年代とは異なった傾向になっている。60歳以上は、ほかの年代よりも「数人」の「数」を、多い数だと考えていることがわかる。

「数人」は、年代によって、認識が違うことばと言えるだろう。

・「数人」の平均は「3.3人」、幅は「2.7人」

「数日」と同様に、単数回答については、平均を、複数回答については、その幅の平均を見た。計算の方法は「数日」と同じである。

その結果、「数人」の平均は、「3.3人」であり、複数回答者の幅は「2.7人」であった。

年代別の平均は図6のとおりである。「数日」同様に、年代があがるに従って平均日数も多くなっている。また、60歳以上の平均は他の年代よりも多い人数を示している。

1-2-3 「数百人」

最後に「数百人」についてである。ここまで、助数詞の違いで見てきたが、ケタが違うことで、「数」の意識が異なるのかを見る。

図6 「数人」(単数回答・年代別%)

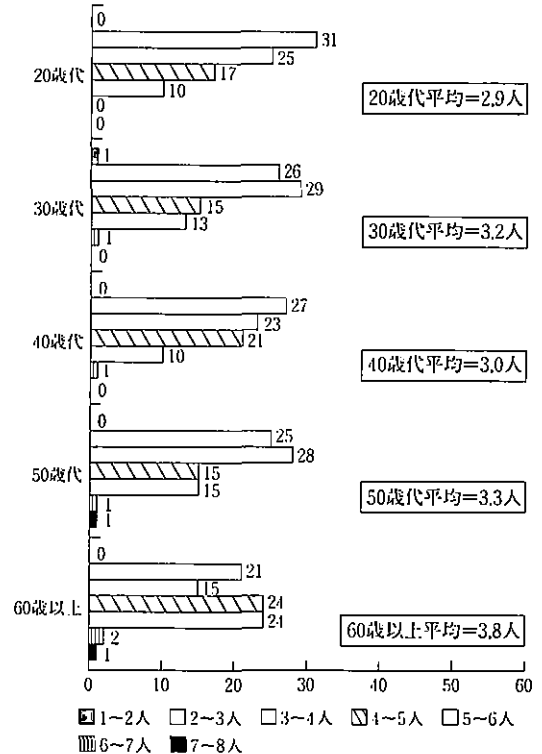
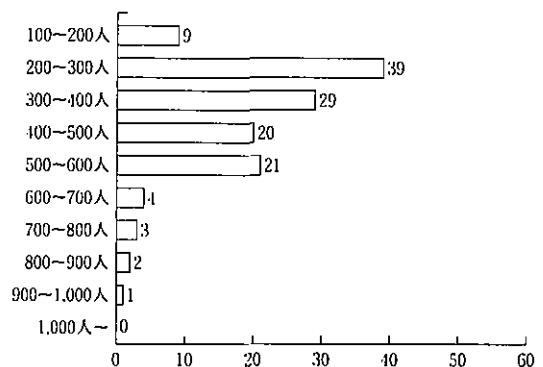


図7 「数百人」(単数回答・複数回答含む%)



・「数百人」の回答は分散

複数回答・単数回答を合わせた結果は、図7のとおりである。「200～300人」がもっとも多く、「300～400人」(29%)、「500～600人」(21%)、「400～500人」(20%)が続いている。

回答が「200～300人」から「500～600人」に分散している。これは、「数人」と同様の傾向である。

また、「200～300人」と「300～400人」の間には差がある。これは「数日」の「2～3日」と「3～4日」で差があるのと同様の傾向である。

選択肢は、「1,000人以上」までの10項目を設けたが、600人以上を答える人はほとんどおらず、「100～200人」も少なかった。

・年代があがるに従って増える人数

次に、単数回答の人だけを見ていくことにする。各年代を合わせたのが図8、年代別には図9のとおりである。

各年代を通して「200～300人」がもっとも多く答えられており、「300～400人」とは差が大きく開いている。

20歳代から50歳代までは、「200～300人」に続いて「300～400人」が多い。

年代があがるに従って、「500～600人」の回答が増えており、60歳以上では「200～300人」に次いで多くなっている。年代があがるに従って、数値の多い回答が増えている。

男女別では、差はほとんど見られない。

・平均は「365人」、幅は「272人」

「数日」「数人」と同様の計算で、平均と、「数百人」の幅を出した。

平均は「365人」で、複数回答者が考える「数百人」の幅は「272人」であった。

年代別の平均は、図9のとおりである。他の年代に比べて60歳以上の平均は多い人数になっている。

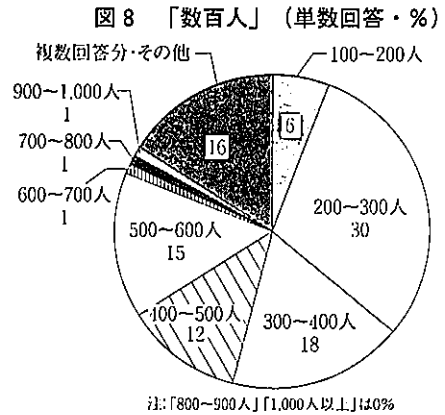
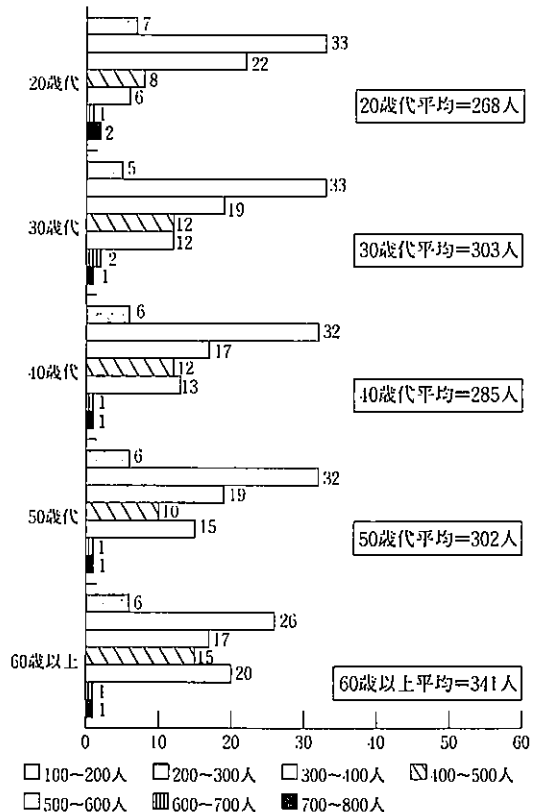


図9 「数百人」(単数回答・年代別・%)



1-2-4 まとめ

・3語をまとめて

各項目の複数・単数の回答を合わせた結果を並べると図10のとおりである。これまで見

てきた内容と合わせて考えると、次のことが言えるだろう。

- (1) 「数日」は各年代を通して、「2～3日」で日数が固定しつつある。

図10 「数〇〇」の結果（単数回答・複数回答含む・%）

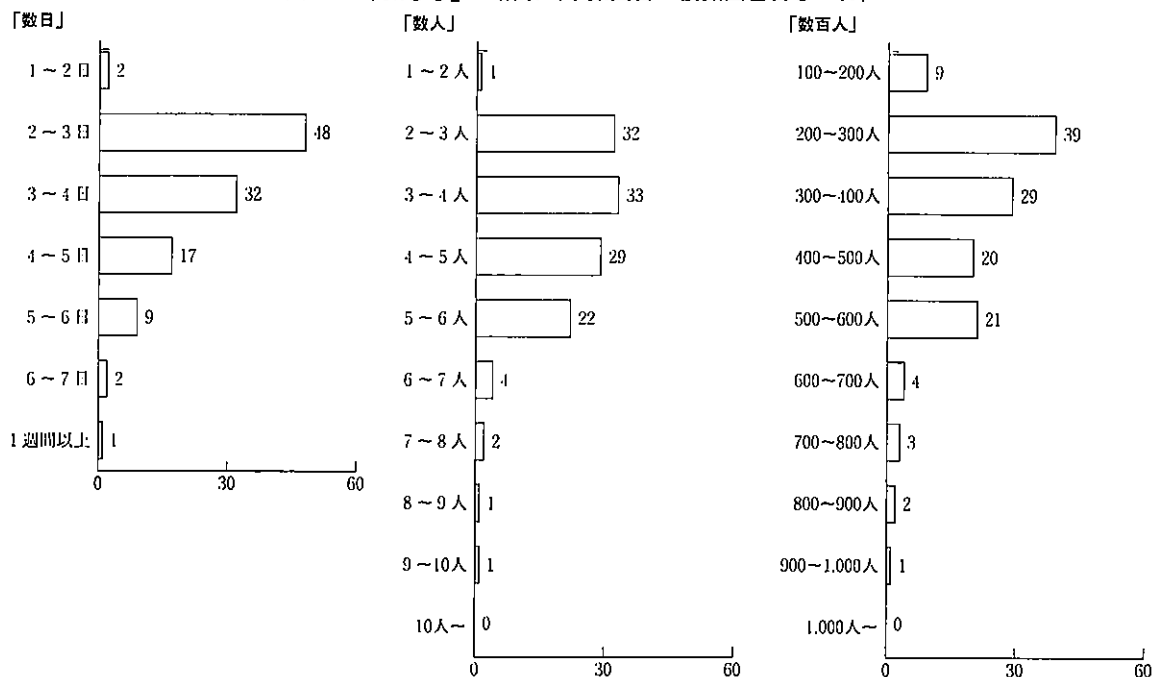


表3 複数回答

数日	%	数人	%	数百人	%
1～2日+2～3日	4	1～2人+2～3人	2	100～200人+200～300人	9
1～2日+2～3日+3～4日	1	1～2人+2～3人+3～4人	2	100～200人+200～300人+300～400人	4
1～2日+2～3日+3～4日+4～5日	2	1～2人+2～3人+3～4人+4～5人	1	100～200人+200～300人+300～400人+400～500人	0
2～3日+3～4日	38	2～3人+3～4人	23	200～300人+300～400人	21
2～3日+3～4日+4～5日	12	2～3人+3～4人+4～5人	15	200～300人+300～400人+400～500人	13
2～3日+3～4日+4～5日+5～6日	4	2～3人+3～4人+4～5人+5～6人	2	200～300人+300～400人+400～500人+500～600人	3
3～4日+4～5日	15	3～4人+4～5人	18	300～400人+400～500人	9
3～4日+4～5日+5～6日	8	3～4人+4～5人+5～6人	10	300～400人+400～500人+500～600人	8
3～4日+4～5日+5～6日+6～7日	0	3～4人+4～5人+5～6人+6～7人	1	300～400人+400～500人+500～600人+600～700人	1
4～5日+5～6日	12	4～5人+5～6人	10	400～500人+500～600人	7
4～5日+5～6日+6～7日	2	4～5人+5～6人+6～7人	5	400～500人+500～600人+600～700人	2
5～6日+6～7日	1	4～5人+5～6人+6～7人+7～8人	1	400～500人+500～600人+600～700人+700～800人	1
複数回答総数（母数）	113人	5～6人+6～7人	3	500～600人+600～700人	2
		5～6人+6～7人+7～8人	1	500～600人+600～700人+700～800人	1
		6～7人+7～8人	1	600～700人+700～800人	1
		複数回答総数（母数）	197人	600～700人+700～800人+800～900人	1
				複数回答総数（母数）	201人

(2) 「数人」「数百人」は年代による差があり、「2～3人」(「200～300人」)から「5～6人」(「500～600人」)の間でゆれている。

(3) 年代があがるほど、日数あるいは人数を多い数で認識している。

そのほか、「数日」「数人」「数百人」を通して、「1」は「数」の範囲に含まないと考える人がほとんどであると言える。「数」は「2」以上の数であるという意識は、各年代変わらずにあるということである。

しかし、今回の調査からもわかるように、実際にどれくらいの数を指すのかは、年代や性別によって、さまざまにゆれがある。「数日」は「2～3日」と意味が短くなる傾向を見せているが、このまま数が限定されていくとは思えない。今後も、意味のゆれが残ることばであろう。

放送で使用する場合、「数」がどれくらいの数値を指すのかを具体的に言うなどの工夫をする必要があるだろう。

(やました ようこ)

・複数回答の傾向

次に、複数回答をした人について見ていく。

表3のとおりである。

複数回答では、2つの選択肢を選ぶ人がほとんどで、各質問ともに「2～3日(人)」(「200～300人」)と「3～4日(人)」(「300～400人」)を合わせて回答している人が多い。

3つの選択肢を選んでいる人の中では、「2～3日(人)」「3～4日(人)」「4～5日(人)」(「200～300人」「300～400人」「400～500人」)の3つを答えている人が多い。

「数日」「数人」「数百人」の複数回答をまとめると、次の2つのことが言える。

- (1) 「数日」より「数人」「数百人」の方が「数」の幅は広く考えられている。
- (2) 「数人」と「数百人」を比べると、「数百人」の方が「100～200人」のように少ない数から答えられている。

・最後に

辞典で見ても、また調査でも、「数」の指す数が、だんだんと変化してきていることは確かである。

2. 「未明」の範囲

次に、「未明」ということばについて見る。「未明」はもともと、「夜がすっかりとは明けきらない時分」「うす暗いころ」という意味である。

しかし、放送では「午前0時～3時ごろまで」を指していることもある。

NHKでは、「午前0時～3時ごろまで」の事件をニュースなどで取り上げるとき、

- (1) 特に必要がなければ「未明」というのを省略するか、「午前〇時ごろ」と具体的に時間を言うほうがよい。
- (2) 時間を特定しにくいときや、漠然と午前0時～3時ごろを指して簡略に表現する必要があるときは「未明」を使ってもよい。としている（※下線は筆者による）。

では、なぜ「使ってもよい」としたのか。この「未明」は1982年の第946回放送用語委員会で審議された。ニュースの見出しなどに用いる場合、その日の午前3時ごろまでを指すことばとしてほかに簡略な言い方がなく、「深夜」「けさ早く」とするのも適切ではない場合があることから、上記のように決定されるに至ったものである。

この決定により、現状では、放送で用いる「未明」の意味と、辞典上で見られる意味が異なっている。では、はたして社会一般ではどのように考えられているのか。これを知るために今回の調査語とした。

質問文と選択肢は次のとおりである(表4)。

表4

Q.「未明(みめい)」ということばがあてはまるのは、何時から何時まででしょうか。この中からいくつでもお答えください。 (ア) 午後11時～午前0時 (イ) 午前0時～1時 (ウ) 午前1時～2時 (エ) 午前2時～3時 (オ) 午前3時～4時 (カ) 午前4時～5時 (キ) 午前5時～6時 ※選択肢の最後に「わからない」を含む。

2-1 国語辞典などの扱い

1603年(『邦訳日補辞書』)以降、現在まで発行されている国語辞典107冊(注1)で「未明」について調べた。この中での初出は前述した「数」と同じ『改訂増補和英語林集成』(1886・丸善)で、見出し語「MIMEI」の語釈には「ミメイ 未明 imada akezu」とあり、さらに英語で「Before the dawn of day」と説明されている。

また、『日本国語大辞典 第2版』(小学館)には、「未明」を「びめい」と読む見出し語の中で『内裏式』(833)五月五日観馬射式其日未明。中務省置尋常位於庭中」という掲載がある。

現在の国語辞典を見ると、説明はどれも同様である。ただし、数字を用いて具体的な時刻を説明する辞典は1つもなかった。これは、日本列島で、たとえば夏至のころだと、日の出の早い地点と遅い地点とでは約2時間半もの時間差が生じるため、数字を用いた明快な説明が難しい実情があるためと思われる。

○『日本国語大辞典 第2版』

夜がまだすっかり明けきらない時。明け方。夜明け前。

○『大辞林 第2版』(三省堂)

夜半を過ぎて、まだ明るくならない時分。

○『角川必携国語辞典』

夜がまだすっきり明けきらない、うす暗いころ。

2-2 先行調査

1993年、NHK放送文化研究所がことばのゆれを調べるために行った調査で、この「未明」を取り上げている(注7)。このときは、「『未明』に関東地方で地震がありました」という文章の場合、「未明」はどういう意味だと思いかを聞いた。このときの調査では、選択肢の時間を大まかに区切り、

- ・辞書の説明と明らかに異なる時分
- ・辞書の説明に近いと思われる時分
- ・放送などで実際に使われている時分

をそれぞれ具体的な時刻で表現して、以下の4つの選択肢にして聞いた(単独回答)。

表5

(ア) 午前0時から3時くらい
(イ) 午前3時から日の出まで
(ウ) 午前0時すぎではっきりとわからない時刻
(エ) わからない
(※「未明は午前3時以降」などという定義はどの国語辞典にもない。調査では大まかな傾向を知るため、便宜的に具体的数字を用いた)

このときの調査では、「午前3時から日の出まで」という国語辞典の説明と同様な回答がもっとも多い41%だったのに対し、「午前0時すぎではっきりとわからない時刻」が31%、「午前0時から3時くらい」が24%であった。

1993年時の調査では、国語辞典上の意味と、ニュースなどで便宜上使われる意味とが、一

般社会で混在している様子がわかった。

2-3 今回の調査

今回は、「未明」が社会でどの時分を指すと考えられているのかを、より具体的に知るために、午後11時から午前6時までの7時間を1時間ごとに区切り、選択肢とした。

また、時間的な幅をもって解釈している人をとらえるために、複数回答で聞いた。

その結果、実際に複数回答をした人は322人で、回答者全体の23%。一方、単数回答の人は「わからない」と答えた人を除いて990人、回答者全体の72%だった。

表6 単数回答と複数回答

	未明	(%)
単数回答	990人	72%
複数回答	322	23
わからない	62	5

(※無回答は0人)

以上のように、「未明」については、ほとんどの人が単数回答であった。しかし、本稿の前半に記述した「数日/数人/数百人」に比べると複数回答をした人が多くなっていて、時間的な幅をもって解釈している人が少ないことがわかる。

2-4-1 「未明」の平均時刻

どの国語辞典でも、「未明」を時刻や数字を用いて説明するものはなかった。では、社会で「未明」は具体的にいつごろの時分と考えられているのか。本稿では、今回の調査で得られた回答をもとに、便宜的にある1点を「未明」の平均時刻として算出してみた。

○単数回答から導かれた(注4)「未明」は、
「午前2時51分45秒」

(※調査を行ったのは2002年12月6日から9日。この4日間のうち12月7日をとると、日の出の時刻は、札幌6時52分、東京6時37分、福岡7時9分で、各地の日の出の時刻にそれほど差はなかった)

複数回答・単数回答を合わせた結果は、図11のようになった。「午前3時～4時」が30%でもっとも多かった。1時間ごとに区切った時間帯では、午前0時から5時にかけての回答がそれぞれ多いことから、「未明」の時分のとらえ方がゆれていることがわかる。

図12は、複数回答をした人を除いて、単数回答の人だけを抜き出したものである。「午前3時～4時」が18%でもっとも多く、次

いで「午前4時～5時」の15%が続いている。単数回答から算出した「未明」の平均時刻は「午前2時51分45秒」だったが、それは、これよりも早い時間帯の回答が多かったためである。

2-4-2 20・30歳代は「午前0時すぎ」 60歳以上は「夜明け前」

次に年代別で見る。単数回答(図13)では、各年代でとらえ方がずいぶん異なっていることがわかる。年代が上がるほど、国語辞典の説明(「夜がまだすっかり明けきらない時分。明け方」)に近い「午前3時～4時」「午前4時～5時」という回答が多くなっている。また、全体の傾向(図11)に近いのが60歳以上だった。

図11 「未明」の時分(単数回答・複数回答含む・%)

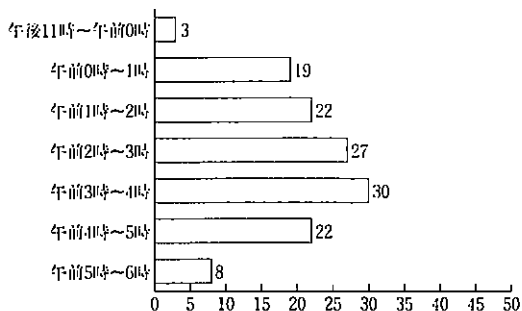


図12 「未明」の時分(単数回答・%)

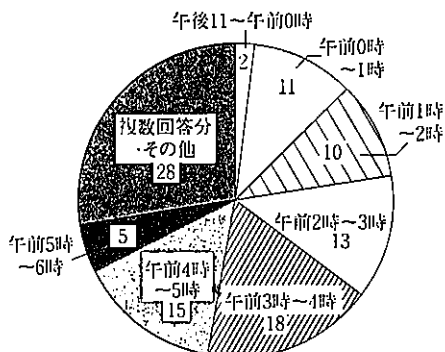
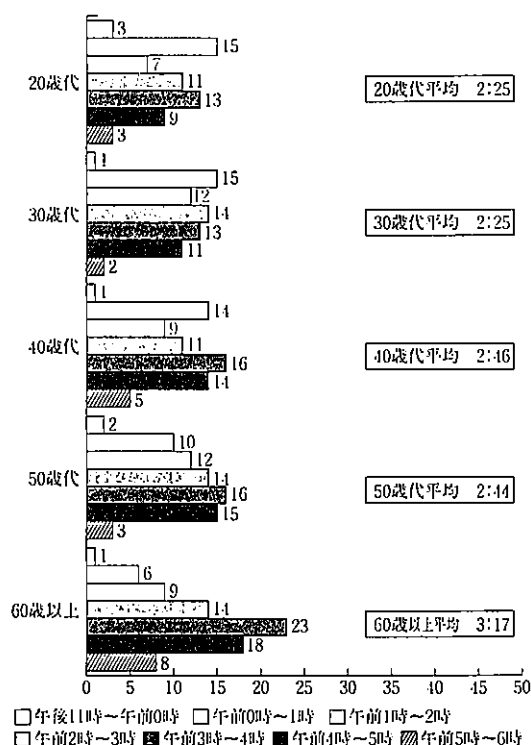


図13 「未明」の時分(単数回答・年代別%)



これに対して20歳代と30歳代では、もっとも多い回答が「午前0時～1時」(ともに15%)となった。「未明」を「夜半」と混同しているのかもしれない。

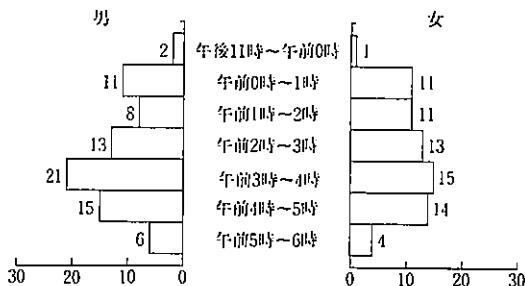
それぞれ年代別に「未明」の平均時刻を算出して比較してみると、20・30歳代はともに「午前2時25分」、40・50歳代は「午前2時45分」前後、60歳以上は「午前3時17分」となった。年代によって異なるとらえ方をしている実態がはっきりわかる。20・30歳代と60歳以上では、「未明」のとらえ方に52分もの差が現れた。

2-4-3 男女別

単数回答を男女別で見ると(図14)、女性は「午前0時～1時まで」以降「午前4時～5時まで」の1時間ごとの回答で、グラフ上、大きな差が出なかったことが特徴的だった。また、回答の割合は男女別でそれほど変わらなかったが、「午前3時～4時」という回答については、男性が女性よりも多いという傾向がうかがえた。

「わからない」と回答した人は、男性が3%弱だったのに対し、女性では6%以上で、この選択肢を回答した女性の多さに有意差が見られた。

図14 「未明」の時分(単数回答・男女別%)



2-4-4 地域別

今回の調査は、平成14(2002)年12月6日から9日にかけて行った。この1年前の平成13年12月7日から10日には、「『おはようございます』という朝のあいさつを何時まで言うか」について調査し、日の出の時刻との関係について言及している(注8)。

このとき明らかにした「『おはようございます』を何時まで言うか」と、今回の調査から算出した「未明」の平均時刻(複数回答)を地域ごとに比較した(表7)。両者にははっきりした関係は見られず、人々の意識にある「未明」の時刻が早いか/遅いかと、「おはようございます」という朝のあいさつをいつまで使えるかは、別の問題であるようだ。また、日の出が早い地域ほど、人々がとらえる「未明」の時刻が早いわけでもなかった。(※調査日2002年12月7日の日の出の時刻の差は、札幌と福岡で17分)

表7 「日の出の時刻」「未明」平均時刻
「何時まで?『おはようございます』」
それぞれの時刻の比較

(地域)	①日の出時刻	②未明平均	③「おはよう」限度の時刻	②と③の差分
札幌	6:52	3:36	9:54	6時間18分
仙台	6:39	2:58	9:31	6時間33分
東京	6:37	4:00	9:39	5時間39分
名古屋	6:47	3:41	9:39	5時間58分
大阪	6:51	3:29	9:53	6時間24分
松山	7:00	2:09	9:43	7時間34分
広島	7:03	4:07	9:48	5時間41分
福岡	7:09	4:18	9:52	5時間34分

(※「『おはようございます』というあいさつを何時まで使えるか」の時刻は、各都市の平均ではなく、各地域ブロックの平均)

2-5 まとめ

人々のとらえる「未明」の時分とは、単数回答から1点の平均時刻でとらえてみた場合、「午前2時51分45秒」となり、国語辞典の説明のように「夜がまだすっかり明けきらない時分。明け方」とは重ならない時分となった。

調査日が冬至に近い(日の出の時刻の遅い)ころだった点を考慮しても、国語辞典が説明する時分(夜明け前)よりもずいぶん早い時分であると思われる。これは若い年代を中心に「未明」のとらえ方が本来の意味の時分と異なり、午前0時過ぎと考える人が多いためであった。

このため、放送では、誤解がないように気をつける必要があることばの1つだと言える。「未明」ということばが使われる機会の多いニュースのリード部分などでは、たとえば「午前0時過ぎ」などと数字を用いてより具体的な時刻で表現することがますます必要になっていくと思われる。

(みやもと かつみ)

注1:

表 調査辞書一覧

辞書名	発行年	出版社
邦訳日葡辞書	1603	(長崎版)
和英語林集成	1872	日本橋濱
改訂増補和英語林集成	1886	丸善
私版日本辞書言海	1889	大修館書店
日本大辞書	1892	明法堂
日本大辞林	1894	宮内庁
日本大辞典	1896	博文館
日本大辞典 ことばの泉	1908	大倉書店
俗語辞海	1909	集分館
辞林(改訂版)	1911	三省堂
辞海	1914	柳文社
大日本国語辞典	1915	富山房
日本大辞典 言葉(初版、2版)	1927/1986	大倉書店
大言海	1932	富山房
大辞典	1934	平凡社
辞苑	1935	博文館
増補新辞典	1935	至文堂
小言林	1949	全国書房
言苑	1951	博文社
国語博辞典	1952	甲鳥書林
明解国語辞典(改訂版)	1952	三省堂
広辞苑(初版～5版)	1955～1998	岩波書店
例解国語辞典(初版、増訂版)	1956/1976	中教出版
新言海	1959	日本書院
新選国語辞典(改訂新版、6版～8版)	1959～2002	小学館
新解国語辞典	1960	小学館
三省堂国語辞典(初版～5版)	1960～2001	三省堂
新版広辞林(15版)	1963	三省堂
新国語辞典	1963	大修館
新辞源	1963	保育社
岩波国語辞典(初版～6版)	1963～2000	岩波書店
新潮国語辞典(初版、改訂、新装改訂、2版)	1965～1995	新潮社
角川国語辞典(改訂101版、新版)	1965/1996	角川書店
講談社国語辞典(初版、新版、2版)	1966～1991	講談社
新国語中辞典	1967	三省堂
富山房国語辞典	1968	富山房
新明解国語辞典(初版～5版)	1972～1997	三省堂
日本国語大辞典(初版、2版)	1972/2000	小学館
国語中辞典	1973	角川書店
広辞林(5版、6版)	1973/1983	三省堂
新小辞林(2版)	1975	三省堂
学研国語辞典(改訂新版)	1976	学研
清水国語辞典(修訂版)	1978	清水書院
学研国語大辞典(初版、2版)	1978/1988	学研
角川新国語辞典	1981	角川書店
国語大辞典(初版、2版)	1982/1995	角川書店
例解新国語辞典(初版、2版、3版、5版)	1984～1997	三省堂
現代国語例解辞典(初版、2版)	1984/1993	小学館
新潮現代国語辞典(初版、2版)	1985/2000	新潮社
旺文社国語辞典(改訂新版)	1986	旺文社
大辞林(1版、2版)	1988/1995	三省堂
日本語大辞典(初版、2版)	1989/1995	講談社
福武国語辞典	1989	福武書店
角川最新国語辞典(再版)	1990	角川書店
清水新国語辞典	1990	清水書院
現代国語辞典	1992	三省堂
現代国語用例辞典	1992	教育社
旺文社群解国語辞典	1992	旺文社
集英社国語辞典(初版、2版)	1993/2000	集英社
辞林21	1993	三省堂
現代新国語辞典(初版、改訂新版)	1994/2000	学研
角川必携国語辞典	1995	角川書店
大辞泉(初版、増補・新装版)	1995/1998	小学館
精選国語辞典(新訂版)	1998	明治書院
明鏡国語辞典	2002	大修館

注2：稲垣文男・石野博史・最上勝也「中学生の言語感覚」『文研月報』1981.5

注3：深草耕太郎・坂本充「「数日後」は何日後？～第7回ことばのゆれ全国調査から（1）～」『放送研究と調査』1997.4

注4：各項目の平均の算出方法は以下のとおり（「数人」「数百人」「未明」も同様の方法で算出）。なお、平均はすべて単数回答から算出する。「数日」を例に説明する。

① 単純集計Q1の1～7までのそれぞれの選択肢について、中間の数字をとる。例えば、「1～2日」なら中間を「1.5」とする。ただし、「1週間以上」は10日より短いと考え、「7～9日」の中間、「8」で計算した。また、「数人」の選択肢にある「10人より多い」は、回答者が1人であり、範囲が特定できないことから、除いて計算した。「数百人」の「1,000人より多い」も同様である。「未明」は「午前1時から2時」の中間点「午前1時30分」を「1.5」と数値化。「午後11時～午前0時」は「午後11時30分」を中間点とし、これを「-0.5」と数値化して計算した。

② ①で得られた値と、それぞれの選択肢を単数回答した人数をかける。

$$\begin{aligned}1.5日 \times 24人 &= 36 \\2.5日 \times 584人 &= 1460 \\3.5日 \times 355人 &= 1242.5 \\4.5日 \times 166人 &= 747 \\5.5日 \times 95人 &= 522.5 \\6.5日 \times 25人 &= 162.5 \\8日 \times 7人 &= 56\end{aligned}$$

③ ②で得られた数値を合計する。
 $36 + 1460 + 1242.5 + 747 + 522.5 + 162.5 + 56 = 4,226.5$

④ ③の数値を単数回答をした人（わからない、無回答は除く）の数で割る。
 $4,226.5 \div 1,256人 = 3.36504777$
小数点2位を四捨五入し、「3.4日」となる。
なお、「未明」の場合は単数回答の人数で割った値を「時」に換算する。

注5：「幅」の算出方法は以下のとおり。各項目の「幅」は複数回答をした人について見る。

「数日」を例に説明する。

① 回答を「2～3日」「3～4日」と答えた人は、「2～4」の差である「2」を幅とする。なお、「2～3日」と「5～6日」を回答し、「3～4

日」は回答しなかった人についても「2～6日」の範囲で考えているものとして計算した。

② ①で得られた数字と、複数回答した人の数をかける。例えば、「2～3日」「3～4日」と答えた人は43人であるため、 2×43 人の計算になる。

③ ②の数値を合計し、複数回答した人の人数で割る。「数日」の場合、113人で割る。小数点2位を四捨五入し、「2.4日」となる。

注6：『言語生活』（1969.1）の中の記事と思われる

注7：浅井真愨・加治木美奈子「「完べきに失敗」はおかしい？」『放送研究と調査』1994.7

注8：塩田雄大「「よろしかったでしょうか」はよろしくないか」『放送研究と調査』2002.3

平成14年度「ことばのゆれ」調査
単純集計結果

1. 調査時期 平成14(2002)年12月6日～9日
2. 調査方法 調査員による個別面接聴取法
(オムニバス方式)
3. 抽出方法 層化副次(二段)無作為抽出法
4. 調査対象 満20歳以上の男女(全国)2,000人
5. 調査有効数(率) 1,374人(68.7%)

Q1 まず、あなたは、「数日」と言われたら何日間くらいのことだと思いますか。この中からあてはまるものをいくつかでもお答えください。(M.A.)

1. 1～2日 2.4%
2. 2～3日 47.6
3. 3～4日 32.2
4. 4～5日 16.5
5. 5～6日 9.2
6. 6～7日 2.1
7. 1週間より長い 0.5
8. わからない、無回答 0.4

Q2 「未明」ということばがあてはまるのは、何時から何時まででしょうか。この中からいくつかでもお答えください。(M.A.)

1. 午後11時～午前0時 2.7%
2. 午前0時～1時 18.9
3. 午前1時～2時 21.7
4. 午前2時～3時 26.9
5. 午前3時～4時 29.7
6. 午前4時～5時 22.1
7. 午前5時～6時 7.5
8. わからない、無回答 4.5

Q3 あなたは、「数百人」と言われたら何人くらいのことと思いますか。この中からあてはまるものをいくつかでもお答えください。(M.A.)

1. 100～200人 8.7%
2. 200～300人 39.3
3. 300～400人 28.6
4. 400～500人 20.2
5. 500～600人 20.6
6. 600～700人 4.4
7. 700～800人 3.3
8. 800～900人 1.6
9. 900～1000人 0.7
10. 1000人より多い 0.1
11. わからない、無回答 0.9

Q4 ハンバーガーやフライドチキンなどのことを、あなたは
どう言いますか。この中から1つだけお答えください。

1. ファストフード 11.4%
2. ファーストフード 71.5
3. このことばを知らない 9.9
4. わからない、無回答 7.2

Q5 次にあげることばは、食べ物の名前を書いたものですが、
どれが最も見やすいと思いますか。この中からそれぞれにつ
いて1つずつお答えください。

- (1) この中ではどれが見やすいですか。
1. キョウザ 8.2%
 2. ギョーザ 30.3
 3. 餃子 60.3
 4. この中にはない 0.4
 5. このことばを知らない 0.1
 6. わからない、無回答 0.8

- (2) この中ではどれが見やすいですか。
1. シューマイ 45.1%
 2. シュウマイ 36.5
 3. シウマイ 5.5
 4. 焼売 11.0
 5. この中にはない 0.4
 6. このことばを知らない 0.3
 7. わからない、無回答 1.2

- (3) この中ではどれが見やすいですか。
1. マーボードーフ 7.1%
 2. マーボドーフ 6.0
 3. マーボードウフ 2.1
 4. マーボドウフ 1.1
 5. マーボ豆腐 29.1
 6. マーボ豆腐 17.5
 7. 麻婆豆腐 35.3
 8. この中にはない 0.1
 9. このことばを知らない 0.5
 10. わからない、無回答 1.2

- (4) この中ではどれが見やすいですか。
1. ウーロン茶 71.3%
 2. 烏竜茶 1.5
 3. 烏龍茶 25.8
 4. この中にはない 0.3
 5. このことばを知らない 0.2
 6. わからない、無回答 0.8

- (5) この中ではどれが見やすいですか。
1. ビビンバ 78.7%
 2. ビビンバ 3.0
 3. ビビンバ 5.5
 4. ビビンバ 0.9
 5. この中にはない 0.9
 6. このことばを知らない 7.9
 7. わからない、無回答 3.1

Q6 あなたは、「数人」と言われたら何人くらいのことと思
いますか。この中からあてはまるものをいくつかでもお答え
ください。(M.A.)

1. 1～2人 1.2%
2. 2～3人 31.8
3. 3～4人 33.4
4. 4～5人 28.8
5. 5～6人 21.8
6. 6～7人 3.6
7. 7～8人 1.6
8. 8～9人 0.7
9. 9～10人 0.5
10. 10人より多い 0.1
11. わからない、無回答 0.3

サンプル構成

全 体	性別		年 齢				
	男 性	女 性	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
1,374人	634	740	159	228	231	285	471
100%	46.1	53.9	11.6	16.6	16.8	20.7	34.3

男					女				
20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
66	105	87	132	244	93	123	144	153	227
4.8	7.6	6.3	9.6	17.8	6.8	9.0	10.5	11.1	16.5

農林漁業	商 工 サービス業	事務職	労務職	自由業 管理職	無職の主婦	学生	その他・無職	無職(計)
35	179	258	285	30	329	21	237	587
2.5	13.0	18.8	20.7	2.2	23.9	1.5	17.2	42.7

ことば・言葉・コトバ

早起きは三文の「徳」か「得」か

「早起きは三文の(トク)。(トク)は「徳」か「得」かが気になり辞書を開いた。

現在発行されている『大辞林第2版』(三省堂)、『広辞苑第5版』(岩波書店)などは「徳」。『現代国語例解辞典』(小学館)、『学研国語辞典改訂新版』などは「得」を採用していた。

三文とは「二束三文」という表現に代表されるように、ほんのわずかな金額である。この「三文」を、わずかでもよいことがある徳ととらえるのか、実際に拾った金で得をしたと見るのかで、トクの解釈が異なってくるようだ。

調べていくと「朝起き」と「早起き」とで「徳」か「得」かの使い分けがあるように見うけられる。

国語辞書で最初に登場する「三文のトク」は、「朝起きは三文の徳」が明治42年の『俗語辞海』(集分館)、「早起きは三文の得」は時代がくだって昭和34年の『新言海』(日本書院)であった。

初出をもっとも多く載せている『日本国語大辞

典第2版』(小学館)でも、「朝起き」と「早起き」では「徳」と「得」の用いられ方が異なっていた。

「朝起き」の項には河竹黙阿弥の「日本晴伊賀報盤」で、「朝起きは三文の徳があるといふから、～」と明治13年の台詞が引用され、「早起き」の項には「早起きは三文の得」として明治22年の禽語楼小さんの落語が紹介されていた。

ところが、『三省堂国語辞典第5版』には「早起きは三文の得」とあり、「得」は正しくは「徳」である」という注釈がついていた。

また、『新明解国語辞典第5版』(三省堂)には「徳」の項に「朝起きは三文の徳=何かいい事が有る。『得』と書いて『もうけ』と解するのは俗解」とあって、混乱する。

早起きは三文の「徳」か「得」か。

どうやら、「朝起き～徳」と「早起き～得」とで異なっているらしいことまでは推測できた。

どちらの(トク)がふさわしいのか、たまには早起きをしてトクと調べてみることにしよう。

坂本 充(さかもと みつる)